

フランスにおけるコレーム地理学の展開とその問題点

手塚 章*

Some Remarks on the Recent Development of *la Géographie Chorématique* in France

Akira TEZUKA*

目 次

- | | |
|-------------------|----------------|
| I. はじめに | III. コレーム地理学批判 |
| II. コレーム地理学の基本的性格 | |

I. はじめに

本シンポジウムでの報告依頼をうけてから、その内容・テーマについて迷っていたが、以下では近年のフランスにおける地誌学研究の状況を中心に述べることにした。そのきっかけは、『ルモンド』の学芸欄に掲載された社会地理学者アルマン・フレモン¹⁾の学界展望である (Frémont, 1995)。そのなかでフレモンは、最近のフランス地理学界における2～3の論争に言及し、とくにコレーム地理学に対する本格的な批判が現れたこと、そして、これが活発な論争に発展するであろうことを指摘した。筆者自身も、フランスにおけるコレーム地理学の展開には、従来から関心があった¹⁾。そこで、この機会をかりて、地誌学理論としてのコレーム地理学の基本的性格を明らかにし、同時に、その問題点を指摘しておきたいと考えたわけである。

ところで、コレーム地理学 (*géographie chorématique*) という表現は、まだ日本でほとんど使われたことがないように思う²⁾。1980年代のフランスでは、これが一つの重要なキーワードとなり、地理学における一大潮流に成長した (Scheibling, 1994)。また、最

* 筑波大学地球科学系 ; Institute of Geoscience, University of Tsukuba

近においては、地理教育の世界にもコレーム地理学の考え方が進出している。たとえば、アシェット社版の高等学校最終学年用の地理教科書をみると、随所にコレーム地理学流の地図表現形態が取り入れられている (Bouvet et Martin, 1995)。このように、choréme や chorématique という言葉は、現在フランスの地理学界で最も注目を集めているキーワードの一つとってよい。

フランスにおけるコレーム地理学の総本山は、南フランスのモンペリエにある地理学研究所 (Maison de la Géographie) である。これは大学に所属する機関ではなく、政府や民間から委託をうけて事業を展開する公益法人であり、ルクリュ (RECLUS) の名称でさまざまな印刷物や雑誌を刊行している。これまでのところ、この研究所の最大の事業は『Géographie Universelle』(世界地理あるいは世界地誌)の出版であり、1990年の第1巻以降、これまで6冊を刊行してきた³⁾。世界地誌には、各国に多種多様なシリーズが存在するが、フランスの『Géographie Universelle』は、そのなかでも別格の存在であろう。19世紀以降、フランスでは3回にわたって『Géographie Universelle』という名を冠した世界地誌のシリーズが刊行され、そのどれもが大成功をおさめた⁴⁾。したがって、いま刊行中のシリーズは第4番目にあたる。そして、その編集にあたっては過去3回のシリーズを強く意識し、とくにヴィダル＝ドゥ＝ラ＝ブラーシュが企画した前回の『Géographie Universelle』(いわゆるG.U.)を非常に強く意識している (Ferras, 1989)。今回の企画が、その後の地理学の進歩を反映して、理念やフレームワークの点で前回とは基本的に異なっているというわけである。

そのことを明確に示そうとしたのが、冒頭の第1巻だったように思われる。第1巻はシリーズ全体の総論にあたり、その前半部分(第1部「世界の解説」、もう少し敷衍して訳すと「世界の地理的解説法」)は、シリーズの監修者であるロジェ・ブリューネが執筆している。これまでもブリューネは、コレーム地理学の考え方を論文や著作のなかでしばしば展開してきたが⁵⁾、この第1巻が現れたことによって、コレーム地理学の全体的骨格を明示したといえることができる。ある意味では、そこで示された理論を具体的な地域ごとに展開したのが、第2巻以降の各論である。ちなみに、前回のG.U.には、そのような原論部分が欠如していた。したがって、この部分こそが今回の試みの最大の新機軸といえ、その評価が問われる部分でもある。以下では、そこで提示されている基本的な理念を整理し、コレーム地理学の特徴をいくつか指摘することにした。

II. コレーム地理学の基本的性格

従来、わが国ではコレーム地理学について、その地図的表現形態(すなわち構造モデル

図) が主として紹介されてきた(青木, 1982; 手塚, 1991)。確かに, コレーム地理学の研究成果は, 地図的表現形態をとって地域構造モデル図として示される場合が多い。したがって, 外からみると, さまざまな構造モデル図の作成がコレーム地理学の本体であるかのようにみえる。しかし, コレーム地理学にはもう一つの側面が存在する。それは, 地域を構造づけるメカニズム(あるいは原動力)に関する議論である。コレーム地理学は決して地図表現をめぐる技術論ではなく, 地域や社会をとらえるイデオロギー的な側面を強くもっている。そこで以下では, コレーム地理学の内容を, (1)地図表現的な側面と, (2)地域構造の本質論的な側面に分けて, それぞれ検討することにする。

まず地図表現的な側面だが, これについてはコレーム概念から出発するのが分かりやすい。コレームについては, ブリュネ自身が『地理学用語辞典』で与えた次のような定義がある。「地理空間の基礎的構造要素。コレームはモデルによって表現することができ, 広く実践されているが, 両者を混同すべきではない。コレームは空間組織の諸法則と対応する。すなわち, 分割, 結合, 非対称, 引力, 前線や対峙, 境界, シナプスなどがコレームの起源である。複数のコレームが組み合わさって‘構造の構造’をかたちづくる。そこには繰り返しみられる形態が存在し, chorotype と呼ばれる。また, 局地的にみれば他とは違うユニークな組み合わせがみられる。コレームを考慮することで, 一般と個別, 法則と個体, 法則定立と個性記述など, 地理学での基本的な矛盾対立を解消することができる」(Brunet *et al.*, 1993, p.105)。要するに, 非常に複雑な現実の空間構造を, シンプルな要素(コレーム)の組み合わせとして把握できるというのである。

これを図的に表現したものが, 図1である。この図の縦方向, maillage (分割) から hiérarchie (階層) までは, 空間組織に関する7つの基本形態を示している。これに対して, 横方向は空間を表現する4つの基本的次元である。そして, これらをクロスさせたものがコレームの一覧図であり, ここに表されている28種類のコレームが, 地域空間の基礎構成要素にあたる。ブリュネによれば, すべての地域空間がこれら28種類のコレームを組み合わせることで表現可能である。すなわち, ブリュネの言葉を借りるならば, これら28種類のコレームは, 地域構造を記述する言語のアルファベットである。個々のコレームがそれぞれ空間言語のABCに相当し, それらを組み合わせることで, 単純なものから非常に複雑なものまで, 地域空間の構造が記述できる。このようにして, コレームは従来の地理学に欠けていた一般理論と個別地域研究の溝を埋める役割をはたす。よくいわれる地理学の二重性, すなわち, 空間の科学という性格と個別の場所に関する知識という性格の対立や矛盾が, これによって解消されるというわけである。これが, 地図表現的な側面からみた場合, コレーム地理学の中心的な論点といえよう。

	Point	Ligne	Aire	Réseau
Maillage				
	chef-lieu	limite administrative	État, région...	centres, limites et polygones
Quadrillage				
	tête de réseau carrefour	voies de communication	aire de desserte irrigation, drainage	graphe
Gravitation				
	points attirés satellites	lignes d'isotropie	orbites auréoles bandes	liaisons préférentielles
Contact				
	point de passage, d'entrée, etc.	rupture, interface	aires en contact	base tête de pont
Tropisme				
	centre d'attraction	ligne de partage	surfaces de tendance	dissymétrie
Dynamique territoriale				
	évolutions ponctuelles	axes de propagation	aires d'extension ou de régression	tissu du changement
Hiérarchie				
	semis urbain	relation de dépendance limites administratives	sous-ensemble	réseau maillé

図1 ブリュネによる28のコレーム (Brunet, 1990, p.119より転載)

基本的には、これできているわけだが、以下では、この考え方を具体的に適用した事例をいくつか紹介することで、コレーム地理学の地図表現的な側面を、さらに敷衍して説明しておきたい。

まず、コレームの組み合わせとして表現された地域空間構造には、類似の性格をもった類型 (chorotype) が存在する。図2は、そのような chorotype の一例であり、熱帯の島

のモデルと題されている。この図は、カリブ海の島々を念頭におけば容易に類推できるだろうが、2種類の非対称によって特徴づけられている。一つは沿岸と内陸のコントラストであり、人々の居住密度がまったく異なる。もう一つは、卓越風に対する風上側と風下側のコントラストで、カリブ海の島々の場合、ヨーロッパからの入植者たちは主として風下側に植民都市を建設した。それに対して、風上側にはサトウキビのプランテーションなどが展開する。沿岸には集落が点々と建設されるが、風下側と風上側を分けるところあたりが、かつては最も周辺的な場所であった。ところが、現在では往々にして、ここがリゾート開発の主要な舞台になっている。以上のような地域構造が、熱帯の島々では繰り返しみられるというのである。

また、ブリューネによれば、いわゆるメガロポリスも一つの chorotype である。ただし、これは所属する事例がもっとも少ない類型で、世界に3つしか存在しない。アメリカ・日本・ヨーロッパのメガロポリスがそれである。これら3つのメガロポリスは非常に似通っている。大きさも同程度だし、形も似ている。そして、いずれのメガロポリスも世界経済の結節点、ブリューネの表現でいえば世界のシナプスとして機能している。

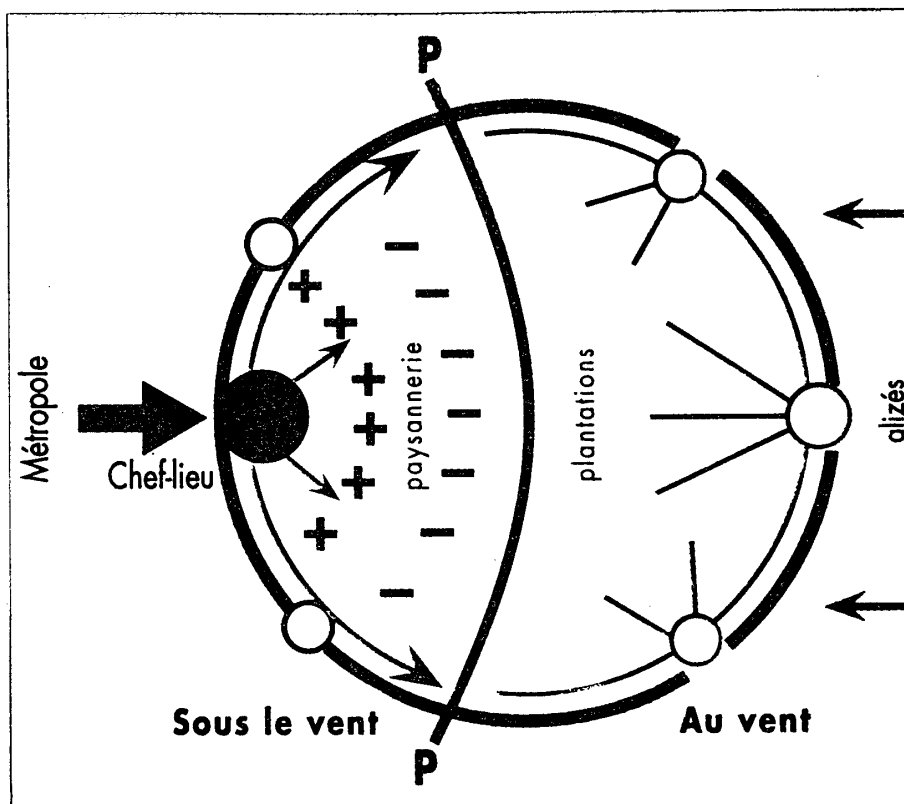


図2 コロティップの事例：熱帯の島のモデル
(Brunet, 1990, p.120より転載)

ヨーロッパのメガロポリスは、よく「ブルーバナナ」と呼ばれて日本でも知られているが、このような捉え方自体ごく最近の産物であり、良くも悪くもブリューネ流コレーム地理学のいわばシンボリックな存在といえる。

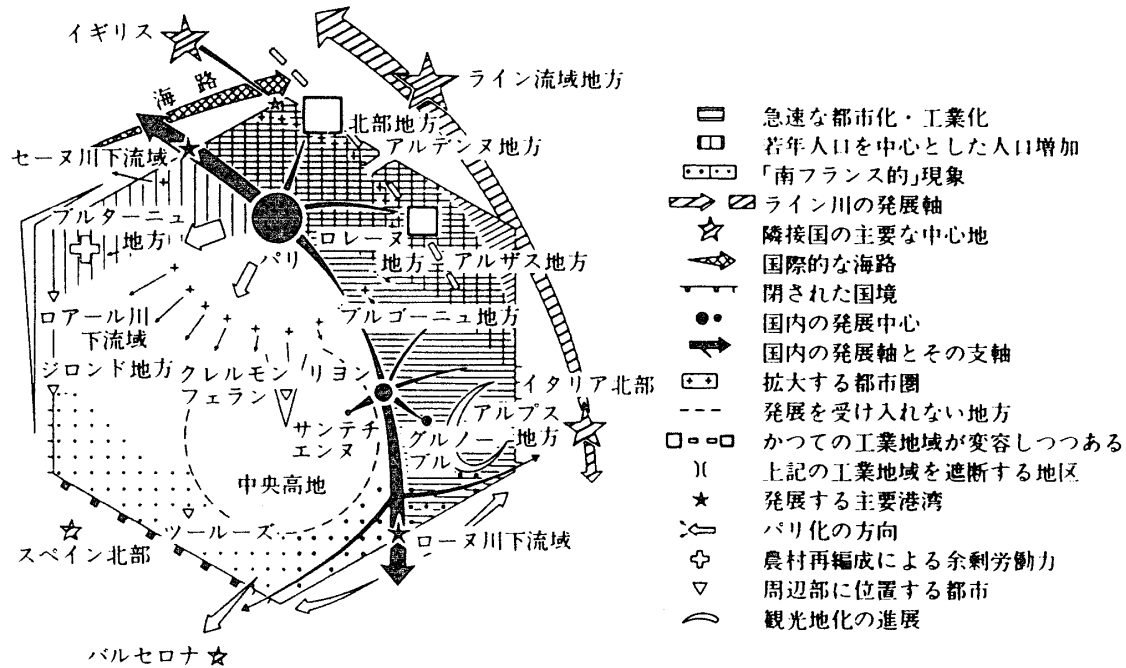


図3 ブリュネが作成したフランスの構造モデル図
(手塚, 1991, p.122より転載)

熱帯の島やメガロポリスのような chorotype に対して、個々の具体的な地域についても多数のコレームを組み合わせた地域構造モデル図が、これまで盛んに作られてきた。なかでも、ごく初期の段階にブリューネが作成したフランスの地域構造図は、日本でもしばしば引用されてきたため、よく知られているであろう(図3)。この種の総合的な地域構造モデル図と、出発点であるコレームの一覧図との間には、かなりのギャップが存在するように思われる。そこで以下では、地図表現に関する最後の事例として、中間的な段階を示すブラジルの構造モデル図をみることにしたい。

図4は、『Géographie Universelle』の第3巻に掲載されたものである。ここでは、ブラジルの地域空間を構成する基本的な構造が示されている。たとえば、図の左上には、もっとも基本的なものとして3つの構造があげられ、ブラジルの基礎構造とされた。そして、これら3種類の図を単純に重ね合わせた左下の図が、基礎的な地域構造のモデル図ということになる。ただし、これでは余りに単純すぎるため、主要な地域的ニュアンスを加味して作成されたものが、右側に並べられた6種類の地域構造モデル図である。著者によれば、

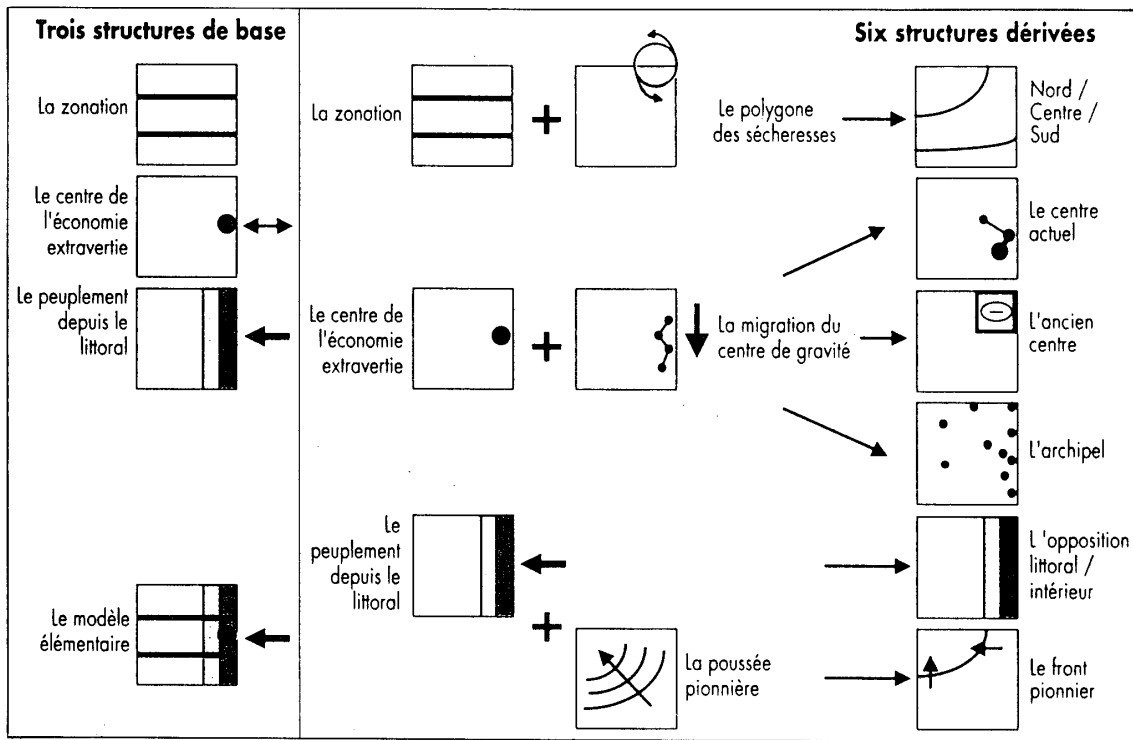


図4 ブラジルを規定する基本構造 (Bataillon *et al.*, 1991, p.390より転載)

これら6種類の構造モデルが組み合わさることで、ブラジルにおける現実の地域構造が規定されている。ちなみに、3種類の基礎構造にしる、6種類の構造モデルにしる、それ自身がコレームではない。いくつかのコレームの複合形態である。したがって、出発点のコレームから最終の地域構造図まで、何段階にもわたって中間的なレベルがあり、それぞれのレベルに応じた地図表現形態があるというわけである。

地図表現的な側面については以上にとどめ、以下では第二の側面（すなわち、地域構造の本質論的な側面）に話を進めることにしたい。

ここでの出発点になるのは、図5である。「世界の解説」には、地域を構造づけるメカニズムに関して、さまざまな模式図がみられるが、それらの中で全体的なフレームワークを描いた図がこれである。その意味で、この図は構造モデル図の背後に存在するコレーム地理学の基本ロジックを示している。

まず、地理学の研究目標は、Aで示されている任意の個別的な地理空間である。また地理学の考察範囲は、主として太い線で囲まれた内側の領域とされる。Aの地理空間を直接

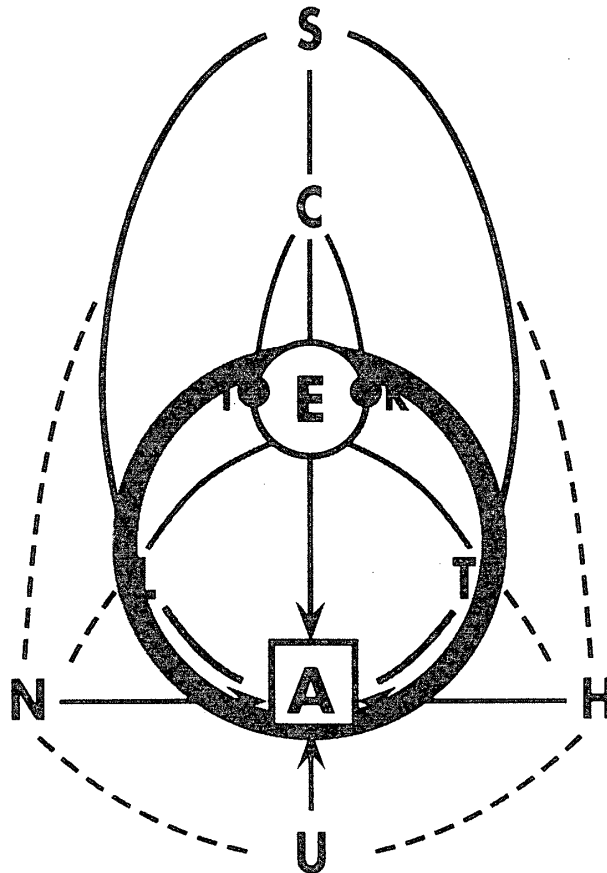


図5 空間生産の一般モデル：地理学における「コロンブスの卵」
(Brunet, 1990, p.155より転載)

A：地理空間 E：エネルギーシステム S：社会 C：政府 L：景観
T：領域 N：自然 H：歴史 U：空間の一般法則 K：資本
I：情報

的に構造づけているのは、Eで示されるエネルギー・システムである。これが、特定の地域構造を生み出し、そして維持する原動力になっている。先に述べた空間的な地域パターンは、いわば結果である。したがって、それを生み出した原動力やシステムを解明しなくては、その地域を理解したことにはならない。

ちなみに、このEの部分をもっと詳しく示した図が、「世界の解説」にはいくつか載せられている。それらの図で用いられている概念をみると、資本や生産手段などをはじめ、主としてマルクス経済学的なフレームワークに基づいていることが分かる。いずれにせよ、システムを作動させるエネルギーは、あくまでも人間（あるいは社会）の行為である。

図5にもどると、太線で囲まれた地理学の中心的考察領域を取り巻くように、4つの外

部的な条件が存在している。社会（S）、自然（N）、空間法則（U）、歴史（H）がそれである。すなわち、これらの4つは地理空間を規定する要因ではあるけれども、結局のところは外部的な条件にすぎない。地理学が最も重視するのは、社会がエネルギー・システムというメカニズムを通して地理空間を構造づける仕方であり、その結果として生まれる地理空間の構造である、ということになる。そして、社会が地理空間を構造づけるときに、かならず空間法則が作用する。それを表現する空間言語のアルファベットがコレームなのである。したがって、この図によれば、自然環境がまったく無視されているわけではないが、もっぱら地理学は社会科学として構想されているとあってよからう。すなわち、地理空間は人間社会の産物として把握されるのである。

以上の要約は、もちろん内容の一面のみをピックアップしたものである。ブリューネが展開した議論は多岐にわたっており、その詳細にわたって検討を加えることは時間の上からも不可能である。それゆえ、あるいは的外れな紹介になったかもしれないが、筆者なりにコレーム地理学の輪郭を整理したつもりである。

そこで以下では、これらの検討を通じて明らかになったと思われるコレーム地理学の特徴を、いくつかの点にしぼって指摘することにした。

第一に指摘すべきは、コレーム地理学が地誌学に他ならないことであろう。もちろん、それ自身は個別の地域研究ではなく、そのためのフレームワークを提示したものである。したがって、本報告の冒頭で述べたように、コレーム地理学は地誌学原理あるいは一般地誌学に相当するといえることができる。このため、その体系のなかには、地理学の伝統的な発想が、いわば手を変え品を変え登場することになる。コレームとかコロティップとか、聞きなれない造語がふんだんに使われているが、それらの意味する内容は昔ながらの伝統的な（陳腐ともいえる）考え方ではないか。コレーム地理学が一部このような印象を与えるのは、その本来的な方向性を考えれば当然の帰結である。

ブリューネ自身、地理学の本質は地誌学（*géographie régionale*）であるという観点に立脚しているように見える。彼によれば、「さまざまな形容詞で奇妙に粉飾されてきた [近年の] 地理学において、唯一無視され続けたのが *régionale* という形容詞であった。われわれは、その復権を叫ばないようにしよう。なぜならば、それは同語反復だからである。*géographie régionale* は、ノスタルジーとともに称揚されるにしろ、皮肉とともに嘲られるにしろ、もはや忘れられた女神であり、王国をもたない女王である。それは神話のなかに留めておけばよい。そして、われわれは一つの科学 [すなわち地理学] のまさに核心へ分け入ることにしよう」(Brunet, 1990, p.266)。しかし、かくして分け入った考察世界は、やはり地誌学の世界なのではあるまいか。ブリューネは「新しい地誌学」とか

「地誌学のルネサンス」という表現を使わないが、彼自身や彼を中心とするグループが十数年来取り組んできたことは、まさに地誌学の理論化あるいは理論地誌学の展開だったことは、その内容から明らかかなように思われる。

そのことは、1972年に書かれた「ある地誌学理論の試み」という短文が明確に示している (Brunet, 1972)。14ページ足らずの短い文章で、ブリューネは地域把握のポイントを以下の9点に整理した。(1)地理空間は不連続である。(2)地理学の研究は網羅的ではない。(3)連続的なまとまりとしての地域は生き生きとした実体である。(4)都市の影響圏は必ずしも地域ではない。(5)結節地域と等質地域の上に本質的な違いはない。(6)地域は構造である。(7)その構造はシステムを反映している。(8)構造は変化するが、どの地域にも存在する。(9)地域構造の比較が研究の中心テーマである。

ブリューネは、これらの主張を作業仮説として提示したわけだが、1990年に発表した「世界の解説」の内容をみると、上記の9点を敷衍し、百倍ほどの分量で詳述したものと言うことができる。しかも、その内容は一般地誌学なのであり、それを実際の地域に適用した地域地誌学は第2巻以降で展開されている。長年にわたる持続的な努力が大きな実りをもたらしたわけで、その息の長さには敬服せざるをえない。

他方、上で述べた地誌学的伝統との連続性が、コレーム地理学というコインの一面にすぎないことも事実である。ブリューネ自身が繰り返し強調するように、コレーム地理学の試みは伝統との断絶、すなわち地理学の革新という側面を強くもっているからである。

もともとブリューネは、1970年代このかた、フランスにおける New Geography の旗頭とみなされてきた。ヴィダル＝ドゥ＝ラ＝ブラーシュを中心に創刊された『Annales de Géographie』が伝統的なフランス地理学派の流れを受け継いでいるのに対して、新しい地理学を代表する学術雑誌に『L' Espace Géographique』がある。ブリューネは、1972年の創刊から現在まで、この雑誌の最大のリーダーなのである。このことは、フランスの New Geography が英米諸国とは異なった流れをたどったこととも関連している。すなわち英米では、理論・計量地理学、マルクス主義地理学、人文主義地理学などが互いに相対立し分岐してきたが、フランスでは、これらの地理学思想が互いに分離せず、絡み合っているように感じられる。しかし、全体として言えば、それは New Geography なのであって、ヴィダル流の伝統地理学と断絶していることが強調されるわけである。

ブリューネ自身、伝統地理学との断絶を非常に強く意識しており、「世界の解説」においても『Géographie Universelle』の新シリーズが、ヴィダルのそれとは意図と内容がまったく異なることを強調している (Brunet, 1990, p.266)。その最もはっきりした表れは、地理学をもっぱら社会科学として構想したことで、第2巻以降の地域記述をみても内容構

成が前回の『Géographie Universelle』とは大きく異なっている。確かに、自然環境に関する記述がほとんど前面にあらわれない記述スタイルは、従来の地域モノグラフでも個別的には試みられてきた。しかし、大がかりな地誌シリーズとしては大胆な決断であり、非常に目新しい印象を与えている。また、上でも述べたように、コレーム地理学の地図表現的特徴として、いたるところで構造モデル図が提示される。むしろこの点が、表面的にみると、新シリーズの目立った特徴になっている。このように、『Géographie Universelle』の新シリーズが既存のステレオタイプを打破しようとし、実際にかなり異なったものを生み出しつつある事実は認めねばなるまい。

それだけに、新シリーズの刊行が進むにつれて、毀誉褒貶いずれにしる、きわめて強い反応が現れることは自然の成り行きであった。以下では、それらのうち、コレーム地理学を真正面から批判したラコストの議論を、かいつまんで紹介することにしたい。

III. コレーム地理学批判

コレーム地理学に対しては、当初から好意的な反応と否定的な反応がかなり明確に存在していたように思われる。上でも述べたように、コレーム地理学には、モデル志向という側面と、社会科学志向という側面が非常に強くみられたため、ヴィダル流の伝統地理学に与する研究者には随分と違和感があっただろうからである。しかし、社会学や歴史学などの分野とは異なり、フランスの地理学界では文章のかたちで発表される公的な批判が伝統的に乏しかった。コレーム地理学に対しても、批判的な意見は廊下でささやかれるが、表だっでの非難や系統的な批判が長らく欠けていた。

ところが、1990年に『Géographie Universelle』の第1巻が刊行されると、その書評というかたちでラコストのコレーム地理学批判が『ヘロドトス』誌上に公表され (Lacoste, 1993), さらに1995年には、同じラコストによる挑戦的な論調の批判文が、これもまたヘロドトス誌上に掲載された (Lacoste, 1995)。本報告の冒頭で触れた「最近のフランス地理学界における論争」は、このラコストによるコレーム地理学批判が最大の眼目になっている。そこで以下では、前節で紹介したコレーム地理学の主要な特徴と関連づけながら、ラコストの論点を簡単に整理しておくことにしたい。ちなみに、ラコストは決してヴィダル流の伝統地理学に属する地理学者ではない。むしろ、ヴィダル流の地理学に反旗をひるがえした研究者であり、ブリューネと同じようにマルクス主義の影響を強く受けた地理学者といえる。ヘロドトスは、ラコストが中心になって1976年に創刊された雑誌であり、地政学 (géopolitique) を前面にすえた内容で、地理学界にかぎらず広い読者層を獲得してきた。したがって、社会的な知名度も高く、ブリューネ同様、大きな影響力をもった指導

的地理学者といふことができる。

さて、ラコストの論点は多方面にわたっているが、前節で述べたコレーム地理学の二つの特徴が、それぞれ批判の俎上にあげられた。まず、地図表現的な側面についてみると、その極度に単純化したモデル図表現が槍玉にあげられている。たとえば、前節でふれたヨーロッパのメガロポリスの図（いわゆるブルーバナナ）は、現在さまざまな文献に登場し、お馴染みの図柄といえるが、その学問的な根拠は薄弱である。それがバナナのかたちをとる必然性はあまりない。にもかかわらず、明らかな事実のごとく地理教科書などで多用されるのは問題である。また、フランスの構造モデル図のように、コレームを複雑に組み合わせたものは、凡例とその説明がバランスを失するほど長大になり、解読が非常に困難である。いずれの場合も、地理教育にとって利点より欠点のほうが大きい。

たしかに、コレーム概念に立脚した構造モデル的な地域把握は、地理学的考察法に関する優れた工夫といえよう。しかし、それはブリューネが主張するように、空間の法則などという性格のものではないと、ラコストは批判するのである。

ある空間をどういったコレームの組み合わせで表現するかは、研究者により大きく異なる可能性がある。客観的で科学的な手順を、ブリューネはどこにも示していないし、これまで数多く作成されてきた構造モデル図の大半については、その作成手順について詳しい説明がまったく欠けている。恣意的なモデルに基づいて因果関係を短絡的に論じるような傾向は、かつてナチスドイツのもとで地政学が陥った独善的な主題図作成と同様の危険性を含んでいる（Lacoste, 1995, p.14）。近年、フランスの地域計画や都市計画で、この種のモデル図がしばしば用いられる。その際、特定の政治目的にコレーム地理学が利用される恐れがある。この点も、コレーム地理学の有害な側面である。

第2に、ラコストの批判は、コレーム地理学の経済至上主義的な性格に対して向けられた。ブリューネによれば、空間は社会によって生産され、その際に関与する空間的法則はそれぞれシンプルなものでも数に限られている。しかし、ラコストに言わせれば、それは空間経済学的な法則ばかりである。それがシンプルであり、数に限られているからといって、現実の地理空間がそれだけで成り立っているわけではない。そもそも「空間の生産」という捉え方が、このような片寄りをよく表している。ブリューネが空間の組織化を論じるときは、つねに経済法則に対応した空間組織が問題になるのであり、政治や文化などといった要因、さらには自然環境がほとんど無視されている。したがって、ブリューネは地理空間という言葉を用いるけれども、その実質的な内容は経済空間にほかならない（Lacoste, 1993, p.240）。このように不完全な地域把握の枠組は、地理学の立場として非常に不十分だというのが、ラコストの一つの論点であるように思う。

たしかに、現実の地域には、自然・経済・文化・政治など、本質的に異質なプロセスが複合的に関与しているのであるから、それらの一面だけを分離して考察しても、それは地理学的な考察とはいえない。しかし、これはヴィダル流ともいえる伝統地理学的な発想で、もっともな意見ではあるけれども、それに捕らわれていたのでは地誌学の進歩が期待できない。実際、ラコストは政治的要素を重視し、それによって地域研究の新しい一面を開拓してきた地理学者でもある。恐らく、ブリューネを始めとするコレーム学派の言動が、近年とくに尊大で独善的な傾向を示している（Lacoste, 1995, p.11）のに対して、反発する気持ちが強いのであろう。このような反発は、コレーム学派の恩恵に浴さなかった地理学者の間で、現在かなり幅広く共有されているように思われる。

注

- 1) 数年前、古今書院の地理学講座シリーズで「地域構造の捉え方」を論じるさいに、ブリューネの関連文献を参考にし、その内容を紹介したことがある（手塚, 1991）。
- 2) ただし、その内容の一部については、今から10年以上も前に青木伸好氏による要をえた紹介がある（青木, 1982）。
- 3) 『Géographie Universelle』のシリーズは以下の全10巻からなる。
 1. Mondes nouveaux. 1990.
 2. France, Europe du Sud. 1990.
 3. Amérique latine. 1991.
 4. États-Unis, Canada. 1992.
 5. Chine, Japon, Corée. 1994.
 6. Afrique. 1995.
 7. Asie du Sud-Est, Océanie. (未刊)
 8. Afrique du Nord, Moyen-Orient, Monde indien. (未刊)
 9. Europe médiane, Europe du Nord. (未刊)
 10. Asie du Nord, Europe de l'Est. (未刊)
- 4) 過去3回の『Géographie Universelle』シリーズは以下の通りである。
 1. Malte-Brun, C. 著, 全8巻, 1810~1829年刊行.
 2. Reclus, E. 著, 全20巻, 1876~1894年刊行.
 3. Vidal de la Blache, P. et Gallois, L. 監修, 全23巻, 1927~1948年刊行.
- 5) 代表的な文献としては、Brunet (1980) および Brunet (1987) があげられる。

文 献

- 青木伸好 (1982) : 地域研究における哲学の影響とその問題. 人文地理, 第34巻, pp.531-550.
- 手塚 章 (1991) : 地域的観点と地域構造. 中村ほか: 『地域と景観』古今書院, pp.107-184.
- Bataillon, C. et al. (1991): *Amérique latine* (Géographie Universelle, T.3). Hachette / RECLUS, Paris, 480p.
- Bouvet, C. et Martin, J. ed. (1995): *Géographie terminales*. Hachette, Paris, 352 p.
- Brunet, R. (1972): Pour une théorie de la géographie régionale. *Mélanges offerts à André MAYNIER*. pp.649 - 662.
- Brunet, R. (1980) : La composition des modèles dans l'analyse spatiale. *L'Espace Géographique*, T.9,

- pp.253 – 265.
- Brunet, R. (1987) : *La carte, mode d'emploi*. Fayard / RECLUS, Paris, 270 p.
- Brunet, R. (1990) : Le déchiffrement du monde. Brunet, R. et Dollfus, O. : *Mondes nouveaux* (Géographie Universelle, T. 1) , Hachette/RECLUS, Paris, pp. 9-271.
- Brunet, R. et al. (1993) : *Les mots de la géographie* (第3版). RECLUS / LaDocumentation Française, Montpellier / Paris, 518 p.
- Ferras, R. (1989) : *Les Géographies Universelles et le monde de leurs temps*. RECLUS (Maison de la Géographie) , Montpellier, 112 p.
- Frémont, A. (1995) : L'an 20 d' «Herodote» . *Le Monde*, 11 août 1995, p.14.
- Lacoste, Y. (1993) : Chorématique et géopolitique. *Hérodote*, no. 69 / 70, pp. 224-257.
- Lacoste, Y. (1995) : Les géographes, la science et l'illusion. *Hérodote*, no.76, pp .3-21.
- Scheibling, J. (1994) : *Qu'est-ce que la géographie ?*. Hachette, Paris, 199 p.

Some Remarks on the Recent Development of *la géographie chorématique* in France

Akira TEZUKA

In the 19th and 20th centuries, France has produced the three famous series of world geography called *la Géographie Universelle*. In particular, the last series (1927–1948) , conceived by Vidal de la Blache, contained some volumes which have been regarded as the classics of regional description. From 1990, the fourth series of *la Géographie Universelle* began and six volumes out of ten have been published till now. This new series has a very marked character, based on one methodological conception called *la géographie chorématique*. *La géographie chorématique* has been one of the most influential streams in French New Geography. At the same time, criticism and objections against this powerful stream have been appearing in recent years. In this paper, the principal characteristics of *la géographie chorématique* are examined and the main objections against it are mentioned.